星城 Seijoh Art Museum 美術館

vol.1

輝く同窓生たち

学校法人名古屋石田学園は1941年の明徳学館の創設に始まり、青少年の精神的な未熟さに憂いを感じ、人づくりの原点となる教育の場の必要性を鑑み、『感謝のできる実践力に富んだ逞しい人間の育成』を根本とする教育目標を掲げ、設立以来、数万人の卒業生を送り出してきました。

学園創立65周年を機に星城高等学校では、第二建学宣言のもと、「リニューアル星城」をスローガンにその校舎を一新し、芸術分野で活躍する同窓生の作品を中心に学園が所蔵する芸術作品を、在校生や地域の方々などに広く公開できるギャラリー設け、展示をするとともに、アトリウムを多様な活動に利用していきたいと考えています。

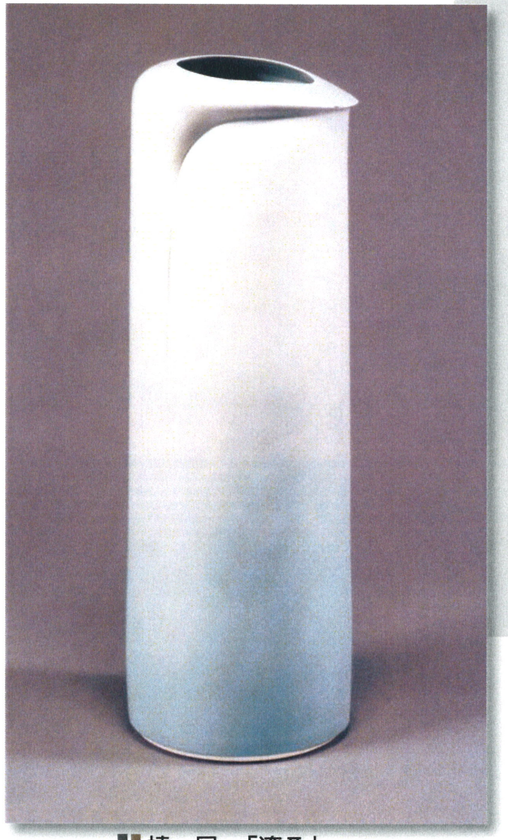
Kazuhiro・Machida

待田 和宏 第6回生

点滴穿石

Profile

大阪芸術大学工芸学科陶芸専攻卒業
その後、楠部彌弌先生（文化勲章受章・日本芸術院会員）に内弟子として師事。彫刻の森美術館大賞、日展特選、上野の森美術館賞など数多く受賞。
現在、日展会友、日本新工芸家連盟評議員。



撓　屈　「遼Ⅱ」

はるか遠い過去から現在、未来へと万物は流転し奏で続けている中太古の色（饒玉＝じょうぎょく）に魅せられ追い求めている。

素人が陶芸を志す

私は、幼い頃から絵を描くことが好きで、いつしか立体的なものにも興味を引かれた。高校卒業後の進路を決める時、芸術分野を志望、当時の担任からの勧めもあり、芸術の道に進学した。陶芸専攻の学生は20名ほどだったが、そのほとんどが陶芸関係者で占められていた。したがって、毎日がその分野の知識を持った学生との戦いであった。何の知識もない私、そんな劣等感が私を毎晩大学へと導いた。ある日、著名な先生から「お前は陶芸家の息子か」と、声をかけられ、それまでの劣等感は吹っ飛び、気をよくした私は、さらに大学にこもり、作品作りに没頭した。

チャンスを生かす

卒業作品に納得がいかず、教授に抵抗した。未完成のまま作品を提出したのだった。結果、留年した。しかし、1年後楠部彌弌（くすべやいち）先生と出会い、内弟子になることができた。そこでも色々苦労はあったが、そこでの本物との出会いが、今、私の大きな財産になっている。昭和54年（26歳）日展に初入選を果たし、昭和57年に独立をした。

信念と継続

師匠の「彩埏」という技法を継承し、私は「彩刻」と名づけ作品を制作している。「点滴石をも穿つ（わずかな力の積み重ねで大きなことを達成する）」を座右の銘として今後も倦（う）まずたゆまず、地道に創作活動を続けて行きたい、と考えている。

工房拝見

閔宏藏窯（こうぞうがま）。安城市の自宅に本格的な工房ガス窯を持つ。

Toshiharu・Hisathune

久恒 俊治 第3回生

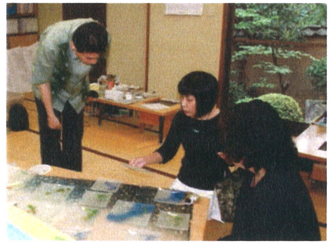
「友禅空間」をプロデュース

Profile

加賀友禅伝統工芸師作家　鶴見保次工房入門。加賀友禅模様師として独立。皇太子妃雅子様、御婚礼用桐箱笥の油単に加賀友禅を染める。手描友禅とコンピュータグラフィックスを融合させた染色を考案。

友禅夢樹六曲屏風「早蕨の歌」

花鳥風月の絵模様を描いた加賀友禅は糸目という防染糊が命。模様の輪郭が白い線になり、色のにじみを止め、繊細な模様を描くことができる。糸目の技術を利用し木に直接友禅模様を染め上げた作品。



工房拝見

友禅の美しさを身近に感じていただけるよう、生活の中のインテリアとして友禅模様を施す。

新聞の募集広告で弟子入り

加賀友禅模様師になったきっかけは、大学時代に第一次オイルショックの時で世の中が雑然として、サラリーマンで会社勤めをするより、一から自分の思いで出来る仕事が良いのではと思った。そんな折、弟子募集の広告が目に付き飛び込んだ。師の元で最後の模様を彩色終えた時、涙が出て自分の歴史の一つが終わった気がした。腕一本、感性で生きる世界が待っていた。

私なりの独自性を求めて

バブルも弾け伝統工芸の世界も生き残りを賭ける環境に置かれている。以前カタライザーより日本の伝統工芸も大変厳しくなるから、ナンバーワンよりオンリーワンを目指せと言われた。試行錯誤している時、新築中の家より檜の香りがして、大工さんより鉋屑を貰い染料で染め、きれいに染まった。防染方法を確立出来ると絵が描ける、木に友禅染めをしようと決めた。今の生活も考えて欲しいと妻は反対したが、誰かが道を着けたのか一人で走っていた。今は家具など調度品に友禅を描いている。

加賀友禅の着物

江戸時代、バテレンは日本女性を見て絵画を着ていると言った。今、友禅は色を着ると言われる。色の構成は人間社会と似ていて、引き立つ色、地味な色、全て必要バランスが大切。着て感動を与える手描きの作家物これが創り手の命だ。

星城高校の後輩へ

私が居る世界は、上手い下手が直ぐ判り、ごまかしが効かない。上手くない所は素直に理解し対策を講じることが出来れば、上手くなるきっかけが現れる。ピンチをチャンスにする事も出来、思いが現実化する。

Bumpei Takahashi

高橋 文平 第1回生

ポルトガルの風景に心奪われ

Profile

上智大学外国語学部ポルトガル語学科卒業。40歳から油、水彩画を独学で始める。ポルトガルの風景を中心にヨーロッパを描く。近隣の「常滑散歩道」なども10数年描き続けている。

「ポルト」

ポルトガル北部の街「ポルト」。苔むしたオレンジ色の瓦屋根が連なる。細い坂道は決してきれいに清掃されてはいないけれど、汚さは感じない。朽ちた壁さえも心に優しく響く。そんな路地からはそこに暮らす「飾らない人々の暮らし」が感じられる。

「リスボンの市電」

細く曲がりくねった路地を、歩いている人に追い越されるくらいゆっくりと走る市電。子供達が「つかまり乗り」している。リスボンの風景にはなくてはならない人々の足「市電」。

「1992年当時の校舎」

今は新しくなってしまった校舎。当時の学校生活や部活、友だちいろいろ思い出される作品。

絵画との出会い・・・

絵に対する興味は幼稚園の頃から。銀杏などの落ち葉で貼り絵を作って園長先生に褒められたことが印象に残っている。小さな頃のいくつかの体験が油絵セットを買ったきっかけで蘇り永い間忘れていた絵の世界へ私を引きずり込んだ。

星城高校の後輩へ

一つのことをこつこつ続ける。ふと自分のまわりを見渡したとき焦りを感じてしまう時もあるかもしれないが、一生懸命頑張っていれば、必ず誰かがどこかで見ていてくれる。それが自分の好きなことだったら一番。

「ほっ」とする景色に出会う

大学生の時以来20年振りに訪れたポルトガルの街。変わっていない街並。人々は楽しそうに、無理せず、気取らず、質素に一生懸命に生きている。「ほっ」とする。そんな暮らしが感じられる風景、街角を描きたい。スケッチブックを手にあちこち旅する。「ほっ」とする景色に出会う。そして描く。想い出が残る。するとそこが自然と心に残る居心地の良い場所にもなる。

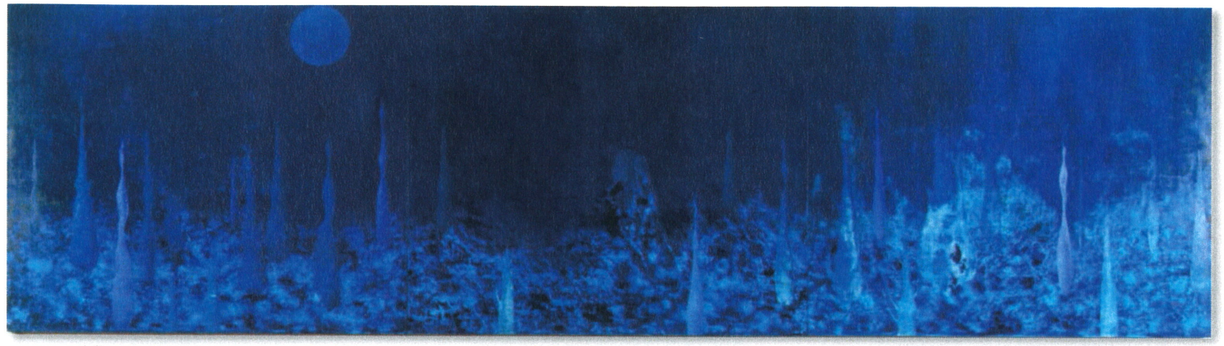
DAO

蛇雄 第1回生

テーマは「生命の誕生」

Profile

放浪後、画家の道へ。
ニューヨークや上海で個展を開催。



「碧の静樹海」

この世の生命のすべての誕生をテーマに32年間それのみを画面に追及して来た。そして気がついた時には海底の世界を描いていた。

青春時代

あれは高校1年生のときだったか？僕は生徒会の副会長に立候補した。学校の隣の池で泳ぎもした。体育の授業であったと思う。とにかく先生と生徒の交わりは、今では考えられない世界だった。それが星城高校の記憶である。そんな高校時代の途中から、一人放浪の世界に旅立った。京都を中心に数年間、ホームレスと仲間になり、詩を書き、多くの人と関わった。そして27歳ごろ我が家に戻り、幼友達が絵を描いているのを見、僕にも描けると、今日から画家になると決意した。僕は油絵の書き方も知らずに、画材を買い、四苦八苦の後、油絵の描き方の本を求め、なんとか絵を描いた。そして、絵を描くために、生活をするために、すぐに簡単な額縁をつけ売り歩いた。それも売れるまでは絶対に家に帰らない思いで　そんな新婚生活であった。

アトリエ拝見

岡崎の山中にたたずむログハウス。
一歩足を踏み入れると、そこは緑と青が広がる世界。

自画の確立

私は私しか描けない絵を描くことに傾注している。物の形のみならずその奥にあるものをどう描くか。1センチ四方に絵を切り刻んでも、私の絵とわかる絵を。深い緑、研ぎ澄まされた青、「深海のヴィーナスたち」それが私の絵だ。

飛躍のとき

今から始まるわくわくとする新たな挑戦。その舞台は中国。ニューヨークをはじめ、世界中で数々の個展を開き私の世界を広げてきた。そんな出会いが私の生涯を賭ける舞台を用意してくれた。中国、上海に建てられる中国国連本部や空港拡張などの大プロジェクト。その施設の内装からシンボルオブジェ、壁画など総合デザイナーとしてのプロデューサーであり、作り手となる。2008年まで私は中国にこもる。そして時の人から歴史の人へと生まれ変わる。

Emiko・Nagai

永井 恵美子 第24回生

福祉と彫刻の融合

Profile

石川豊氏（二科展会友）を父にもつ。
27歳の時と、28歳の時に二科展に入選。
中部二科展で中日賞受賞。

「親子合作」で完成

校長先生から中日賞の受賞を機に卒業生の作品を校内に置きたいとお話をいただき父との共同制作というかたちで初めて石彫にチャレンジした。当時、柔道が全国大会で優勝するなど部活動が勢いにのっていたので、モニュメントのモチーフに柔道、野球、吹奏楽などの学校での楽しいクラブ活動を取り上げ星とシャチのシンボルに重ね合わせた。そして父はデッサン、私は石と格闘。クラブの練習にも通いつめ1年かけて完成した。

夢

現在は子育ての真っ最中で何もできない私だが、保育の他に福祉などにも強い関心があり、父の作品を中心に現在のアトリエに彫刻や版画の美術館を開き、障害を持った方々と自然に関われる場を設けていきたいと思っている。

星城高校の後輩へ

自分のいちばんやりたいこと、その時しかやれないことをやってほしい。やはり高校時代はエネルギーが満ち溢れているときだと思うので、やりたいことを見つけて頑張ってほしい。

高校の思い出

当時の星城高校には保育科があった。普通科では行わない幼稚園での実習や、国家試験に向けてクラス一丸となって勉強したり、友人同士深いきずなができたり、それが今の子育てや福祉への関心をもつきっかけとなった。

躍動

星城高校に通う、若さあふれ、輝く若者たちを石という堅物で素朴な素材で表現した愛情豊かな作品。

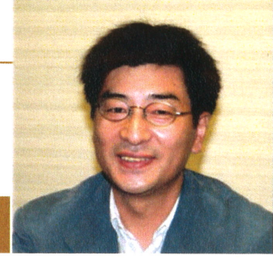
共同制作

彫刻に魅せられ、彫刻と共に50年以上の歳月を重ねた父豊氏との初めての制作。

Shin・Ozaki

尾崎 慎 第15回生

緊張感のある日



Profile

多摩美術大学大学院彫刻家修了。
神戸具象彫刻大賞展'87優秀賞、アートヒル三好ヶ丘'90彫刻フェスタ審査員奨励賞等受賞、スウェーデンにも長期滞在後、毎年、個展を開催。美術家連盟会員。

和

人は一人では生きていけない。友達であったり両親であったりそんなささえ合うことの大切さを表現した作品。

工房拝見

石彫のつどい（中津川市蛭川）での制作風景。ひるかわ石で新しい石の文化を創る。

16歳の時に「彫刻家」を決意

私は、両親が画家だという、幼い頃より美術に対して自然に触れる家庭に育った。星城高校1年生の時に父からヨーロッパの作家の作品集をもらい、それがこの分野へ進む引き金となり、彫刻家を目指す事となった。

石との対峙

絵画は、絵筆とキャンバスがあればいつでもできる。彫刻は、打てば跳ね返される石の抵抗感に打ち勝って自由に扱いたいと強く思い、やり直しがきかないということも私に大きな緊張感を与える。精神面も非常に大事で、心が負けていると石はとてつもなく硬く感じる。しかし、思うように扱えたときは、全身が感動に包まれる。

彫刻に「生命感」を見出す

ただ生きているだけで大変な世の中で、ゆとりを大切にしたい、人間の信条とか人間の絆とかを表現したい、その中でおこりうるものを彫刻で「生命感」として見出したい。

今の作風になったきっかけ

学生時代はデッサンをするとか基礎的な事ばかりに頼っていた。その反面、自分はこんなものじゃない、自分の中に内在するものが他にあるのではないかという思いがあった。卒業して、その瞬間は訪れた。私は非常にとまどいを感じたが、同時に心地よかった。これは何だろうと母に相談をした。すると意外にも「いいんじゃないの」と言われ、ここから性別・人種をこえた「人」の作品となった。

星城高校の後輩へ

目標は誠実に強い信念を持って行えばかなう。

Seijoh Art Museum

星城大学・星城高等学校はじめ学園は、卒業生の作品や、学園関係者の作品を中心に百数十点の絵画や、彫刻などを所蔵しています。同窓生や、学園関係者、地元出身で世界的な作家の三岸節子さんや、杉本健吉さんの作品など多様な内容の美術館として常設、仮設等で随時展示会を開催していきます。

「遊蝶花」
杉本健吉作

「火の山にて飛ぶ鳥」
三岸節子作

「仰星」
石田武至作

星城美術館所蔵作品の作家

【同窓生】（敬称略）

● 高橋 文平　● 蛇雄　● 久恒 俊治　● 待田 和宏　● 尾崎 慎
● 永井恵美子

【学園ゆかりの作家】（五十音順・敬称略）

●石川 豊　●石田 清　●石田 武至　●伊藤 正義　●大河内 久男
●梶川 賢司　●楠 崇子　●工藤 潔　●小林 雅英　●千国 朝子
●野村 卯　●牧野 秀一　●三浦 禎子 他

【郷土ゆかりの作家】（五十音順・敬称略）

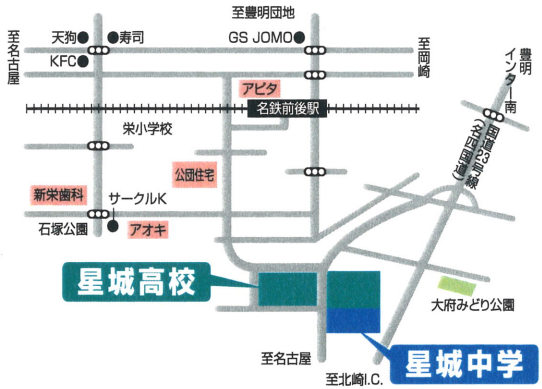
●生田 文治郎　●磯谷 桂治　●伊藤 勲司　●笠井 誠一　●久野 和洋
●白井 久義　●杉本 健吉　●鈴木 三五郎　●鈴木 順一　●西川 吉彦
●中嶋 岩雄　●橋本 博英　●三岸 節子　●宮脇 晴　●山内 一生 他

星城美術館
Seijoh Art Museum

学校法人名古屋石田学園

星城大学／星城高等学校／星城中学校／星の城幼稚園
星城大学リハビリテーション学院／名英図書出版協会

協力　星城高等学校同窓会　星城懇話会



■ 〒470-1161　豊明市栄町新左山20
Tel:(0562)97-3111　Fax:(0562)97-2015
Url:http://www.n-ishida.ac.jp/